アジア・アフリカ地域研究 第24-1号　2024年9月
Asian and African Area Studies, 24 (1), 2024

書　　評

清水　展.『アエタ 灰のなかの未来―大噴火と創造的復興の写真民族誌』京都大学学術出版会，2024年，304 p.

木村周平 *

本書は著者による，フィリピンのルソン島西部，ピナトゥボ山麓で暮らすアエタの人々―とくにカキリガン村という小さな村で暮らし，1991年のピナトゥボ山の大噴火で被災し，そこから「創造的復興」を成し遂げてきた人々―との50年近い関わりと，それに基づく文化人類学的な実践や思考の展開を「写真民族誌」としてまとめたものである．

本書は，著者が実践してきた「応答の人類学」の，出版物のレベルでの実践だといえるだろう．本書を手に取ると，濃いオレンジの地にアエタの母子の顔が大写しになった表紙が目を引きつける．さらに中を開くと，数多くの写真を含んだカラフルでポップなページが目に飛び込んでくる．そこからは著者やその周囲の人々の，この「写真民族誌」を，「業界」で読まれる学術書を越えて，より広い読者と共有していこうという挑戦の姿勢を感じることができる．

まず内容を紹介しよう．「序―カキリガン村アエタと私の長く深い関わり」では，紙面が上下に分けられ，上部を写真が，下部を文章が占める．文章部分は「私」を主語に語りを始めつつ，本書の主人公がアエタの人々であると宣言する（p. 11）．そして「写真民族誌」などの本書の手法や，アエタの人々のレジリエンスを描出することで危機を生き延びる手がかりとする，という本書の目的を示す．写真部分は著者のアエタとの関わりを時代順に配置し，以降で展開するストーリーを絵巻物のように表現している．

第Ⅰ部「先住民社会のレジリエンス」は，本文は3段組みで，ほぼ全ページ多色刷りである．基本である文字の黒と紙面の白，表紙のオレンジに近い暖色という3色をベースに，段組みを利用した多様なサイズ（見開き2頁分／1頁分／2段分／1段分）の写真や図をリズミカルに配置した「写真民族誌」となっている．

第1章「噴火前の暮らし」はアエタの人々の生業から外部との関わり，歴史，そして家族や社会組織などが，流れるように読みやすく説明され，「重層的並存」「万物諸霊共存社会」などのキーワードが示される．またナンバーをふった5枚の写真で焼畑耕作のプロセスを図解したり，写真と本文で積極的に個人名を示し，本章の記述が単なる解説ではなく「アルバム」のような親密な雰囲気を出したりする，などの工夫もなされている．

第2章「噴火の衝撃」は，1991年のピナトゥボ山大噴火をめぐる短い章である．前半は黒地，後半は薄いグレーの地に（おそらく噴煙と火山灰のイメージだろう），景観の写真を多く配しながら，噴火，避難，そして復興へというプロセスが辿られる．それに続く第3章「創造的復興へ」は一転してカラフルな章であり，人々の活動を写した小さめサ

* 筑波大学人文社会系

イズの写真を多数配置することで活気ある雰囲気を出しながら，アエタの人々の復興の道のり，およびそこに著者も含む日本人たちがどのように関わってきたのかが説明される．第 4 章は「カルメリータの人生行路―コミットメントする人類学者」と題されているが，どちらかといえば著者の人類学者としての人生行路を虚心坦懐に振り返る章である．本章最後に示される「相互性原則」の実現を目指し，お世話になった人々への「お返し」のひとつとして子どもたちをマニラに「修学旅行」に連れていったこと，カルメリータを日本に連れてきたこと，そしてピナトゥボ山大噴火後音信不通になってしまった彼女と数年前に再会できたことなどが語られる．角を丸くしたり，人物に合わせて切り抜かれたりした変形の写真が使われ，やわらかで楽しげな雰囲気が醸し出されている．

第Ⅱ部「人類学と私たちの生き方の新しい転回／展開」は，本文 1 段組でほぼ写真はなく，印刷もモノクロで，レイアウト的にも通常の研究書と似た印象を与える．第 5 章「変化と持続―被災からの創造的復興」は，サイードや桑山らを引きつつ，日本の人類学者である著者自身の立ち位置からどうアエタの人々に迫れるのかを考察したうえで，第Ⅰ部の内容を辿り直しつつ，かれらの「トランスフォーマビリティー」や「積極的で柔軟な適応力」などをその強みとして描き出す．この章が第Ⅰ部の結論にあたるとすれば，第 6 章「人類史への示唆―ジェームス・スコットの仕事を手がかりにして」は，より広い読者とその含意を共有しようとする章である．同時代的に影響を受けてきたスコットの研究を参照しつつ，[1] アエタの人々の生き方を浮かび上がらせ，かれらの「生業の重層的並存や食料獲得手段の多角化」（p. 258）という生存戦略を，我々が危機の時代を生き，さらに「別の社会を構想する」（p. 259）手がかりとして示す．第 7 章「いま，ここ，の物語から人類の未来へ―『鈍感な凡人』が運良く人類学者となれた意味」は，本書全体の結論といえる章で，本書についての著者の意図が説明し直されるとともに，現代人類学の祖といえるマリノフスキによる，結果的に頓挫してしまった「現実にコミットして人類学を活用する」（p. 270）プロジェクトに著者自身の歩みを結びつけ，さらに中村哲の活動にも触れながら，著者の考える人類学者のあり方やフィールドワークの意義が論じられる．

「想定外の外部世界との出会いと伴走で得たこと―結びに代えて」では改めて本書の狙いが述べられ，「謝辞」では本書作成の舞台裏が包み隠さず語られ，著者のこれまでの歩みに関与してきた人々への感謝の意が示される．

本書を評するうえでは，まず「写真民族誌」を取り上げる必要があるだろう．これは，民族誌にとってきわめて重要な要素―マリノフスキ［2010］が「不可量分」と呼び，箭内［2018］が「イメージ」として展開したもの―を，読者とよりよく共有する試みだ

1）スコットと別の方向性として，著者のアプローチとマンチェスター学派の extended-case method との近接性は，別稿で改めて論じたい点である．

といえる．その意味で，本来は「業界」外の読者こそがこの成否を判断する立場にあるだろう．「業界」内にいる評者としては，第Ⅰ部での多様な写真は，本文をサポートしつつ，本文では語り切れない多様な「イストリア」（お話）の存在を示唆することで，本書に親密さと厚みを与えており，それによって本書は，写真集と民族誌の中間のような，新たなジャンルを切り開いていると考える．

この「写真民族誌」は，著者も述べるように，出版社とデザイナーという別のプロたちとの協働なしにはありえなかっただろうが，後続の人類学者たちも活用しうるさまざまな手法と，さらに展開すべき大きな可能性を提示している．ここでは関連する論点（問い）を 3 つだけ示しておきたい．ひとつは，写真民族誌であることと理論的・抽象的な議論を展開することとのバランスをどう取るか（本書は部を分けることで対応しているが，他のやり方はありえるか）．ふたつめは，写真が本文をサポートするだけでなく，逆に写真が本文をリードするような民族誌は可能か．もうひとつは，写真の並置から生み出される新たな時間性（たとえば，ひとつの見開き内でのカラー写真と白黒写真の共存は，前者をより最近に，後者をより過去に見せてしまいうる）をどう生かすか．

また人類学の立場からは，「相互性」をどう考えるかも重要な点である．本書を読んでいると，直立し，またはしゃがんで真っすぐこちらを見つめるたくさんの視線にぶつかる．著者も言うようにアエタの人々が当時写真慣れしていなかったせいかもしれないが，この「こちらが見られる」感覚は，この「相互性」につながるものだといえるだろう．

著者の影響もあり，現地への「恩返し」や「応答」，「協働」は，人類学でもしだいに一般的になりつつある．現地の人々が人類学者（やその社会）を人類学する，という意味での「相互性」も，科学人類学などでは実現可能かもしれない．だが「相互性」への期待が人類学者の側の思いの投影になりかねない点は気をつけるべきだろう．ワグナー［Wagner 2016］がカーゴカルトを事例に言うように，反転した人類学は既存の人類学とは大きく異なるかもしれない．その意味で，カルメリータやその他の人々の「声」から，かれらにとっての「相互性」とは何かを改めて考えてみることも意義があるだろう．

しかし何より，本書の主人公はアエタ（だけ）ではなく著者（も）だ，という点は指摘せざるをえない．著者は表裏も妬みも邪心もなく，自らの弱さを晒し，他者への感謝と祝福を口にする．そうした態度が，著者がこれほど慕われる，そしておそらく著者のここまでの歩み（本書の刊行を含め）を可能にしてきた理由のひとつだろう．本書には（繰り返しの多さに加えて）気になる点もある．たとえば「防災や開発，ケアや福祉といった領域で活躍されている方々」（p. 10）が本書の知見をどう活かせるかの道筋はけっして明確ではないし，「巻き込まれ」や「偶然」の強調は，すでに現場に関与している人々の現状を肯定しても，これから何かしようという人には直接役立てにくいかもしれない．しかし評者には，本書を包む著者（へ）の愛が，それ

らに勝ってしまうように感じる．

本書はアエタ（と著者）への格好の入門書であるし，著者と接したことのある者にとって本書は，さまざまな機会に著者から聞いたことのあるイストリアの，ロングバージョンといえるだろう．言い古された表現だが，イストリアは贈与だ．親密な場において先達から語られる．受け手は語られる具体的な個々人や出来事から，それぞれの感度・タイミングで，さまざまな（語り手の想定を超えて）示唆や学びを受け取る．そしてそれをまた後の世代に伝えていくだろう．願わくはこの贈り物が，その親密な空間にますます多くの人々を巻き込み，そして多様で創造的な応答を生み出していかんことを！

引　用　文　献

マリノフスキ，ブロニスワフ．2010.『西太平洋の遠洋航海者』増田義郎訳，講談社.

箭内　匡．2018.『イメージの人類学』せりか書房.

Wagner, Roy. 2016. *The Invention of Culture*, Second Edition. Chicago: The University of Chicago Press.

茅根由佳.『インドネシア政治とイスラーム主義―ひとつの現代史』名古屋大学出版会，2023 年，282 p.

大形里美 *

本書は，インドネシアにおけるイスラーム主義イデオロギーの論理とその盛衰のメカニズムを明らかにしようとした研究である．著者は，同国のイスラーム主義の主要なルーツとされる議会制民主主義時代（1949–1959 年）のイスラーム政党マシュミに注目し，党首ナッシール（1908–1993 年）の近代主義的な民主主義思想を分析したうえで，彼の思想がその後，同国のイスラーム主義勢力によってどのように引き継がれてきたのか，あるいは引き継がれてこなかったのかを論じている．ナッシールは，1950 年から 1951 年にかけて首相を務めたが，イスラーム国家樹立の反乱軍に参加し，その後政界から追放された人物である．

本書の構成は以下のとおりである．

序章
第 1 章　民主主義の擁護者としてのマシュミ
第 2 章　近代主義思想と宗教的少数派排除の論理
第 3 章　「政権派」への変容
第 4 章　民主化後の旧マシュミの分裂と迷走
第 5 章　宗教少数派排斥運動の活性化
第 6 章　理念なき圧政批判
終章　インドネシアの民主主義とマシュミの伝統

第 1 章では，ナッシールの思想が分析され，彼がイスラームにおける他者への寛容や多様性の尊重を，民主主義を支える道徳的規範とみなし，建国五原則（パンチャシラ）を国家理念とするインドネシアを明白な「イスラーム国家（Negara Islam）であると解釈していたことが指摘される．

* 九州国際大学現代ビジネス学部国際社会学科